【183】

| | |
|---|---|
| 氏　名（国籍） | 崔（ちょい）　炳玉（びょんおく）（韓　国） |
| 学位の種類 | 博　士（学　術） |
| 学位記番号 | 博　甲　第　4015　号 |
| 学位授与年月日 | 平成18年3月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 生命環境科学研究科 |
| 学位論文題目 | **青果物市場の水平的・垂直的価格統合に関する時系列分析**<br>－韓国・日本比較研究－ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学教授 | 農学博士 | 永　木　正　和 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | Ph. D. | 徳　永　澄　憲 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 農学博士 | 弦　間　　洋 |
| 副　査 | 筑波大学助教授 | 博士（農学） | 納　口　るり子 |

## 論文の内容の要旨

本研究は，(1) 旧来の「市場統合」の理論的概念を手がかりとしながら，それを狭義に，かつより厳密に定義することによって，市場の価格効率（市場パフォーマンス）が具体的に計測されるべきであることを提案し，(2) 日本と韓国の青果物卸売市場への適用分析から，韓国の青果物卸売市場システムの改善方策への示唆を得る目的の，計量経済学研究である。

まず「水平的価格効率性」と「垂直的価格因果性」の2指標を定義し，この両指標から成る「水平的・垂直的価格統合」を価格形成面からの市場効率性を測る指標として理論的に定義した。次に，その計測手法として，時系列分析法を援用して計測する方法を提示した。そして，韓国の青果物卸売市場流通の近代化を視座に置きながら，日本と韓国の青果物卸売市場機能の価格効率を計量的に計測し，とりわけ韓国の卸売市場効率の改善（流通の近代化）の方策を導き出した研究である。

本研究では，青果物流通の中心に卸売市場を位置づけた。それは，卸売市場のセリ価格形成が，原理的には最も効率的な価格決定方式だからである。市場・流通システムを近代化する上で，卸売市場の価格形成機能，ならびに価格情報発信機能は重要である。韓国では商人資本が産地流通の太宗を担っていて，卸売市場経由率は低い。日本では逆に卸売市場離れが進んでいる。そのような状況にあって，双方で卸売市場の役割が揺らいできている。卸売市場の価格形成機能を明らかにすることは重要である。

以下に本研究から得た結果を要約する。

(1) 韓国と日本の青果物卸売市場の価格統合を比較した結果，期待されたほどの十分さではなかったが，日本の卸売市場の方が韓国よりも価格統合の程度が高かった。この相違の原因は，日本の機能組織化された産地の市場対応にあった。日本では系統共販が一般化しており，産地は計画生産，共同選果，計画出荷・貯蔵を進めている。このことが，相対的に高い価格統合を実現させていた。

(2) 日本では，青果物卸売市場の取引方式が「委託販売－セリ価格決定」から「委託･一部買い付け－セリ・一部相対」に変わったが，卸売市場の価格効率はさらに向上した。卸売市場の新しい取引方式は，それに関わる経済主体が短期的な需給変動による価格変動に敏感に反応し，長期均衡価格水準を指向して短期的

に安定させようと行動していた。

(3) 韓国では，周年生産が進み，大量・安定消費している大根，白菜であるが，有意な水準で価格統合の存在を検出できなかった。背景に，物流の地域的偏重や市場情報の不完全性が指摘できた。ただし，「一物一価の法則」を検定する分析で価格系列に共和分を析出したことから，長期均衡価格の存在は認められた。結果として，卸売市場が需給からみて適正に価格形成する機能を十分に果たせていないこと，そして産地規模の零細性，専門出荷組織の未組織のため専門業者による市場外取引が大きい割合を占めていることに関係付けた。言い換えると，卸売価格がこれら市場外の相対取引に十分に影響を及ぼしえなかったことによる。

(4) 韓国での垂直的な価格因果性の弱さは，産地側の生産･出荷の硬直性，市場対応の遅れである。さらに，最近の大型量販店がロジスチィックス物流システムを導入し，近代化を進めたが，川上側のロジスチィックス化対応の遅れが，川上側に，一層，形勢不利な取引を強いる結果になっていた。

最後に，以上の結論から，韓国の青果物流通の近代化に向けた示唆を与えた。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

農産物市場，あるいは農産物取引のあり方を評価する観点で，経済学の教える市場競争理論に依拠して定量的にそのパフォーマンスを市場統合の理論に基づいて計測する研究はあったが，水平的価格統合と物流過程の各段階に対応した垂直的な価格因果性も加味した「価格統合」の考え方，そしてその計量分析の方法はなかった。本研究は，時系列分析法の援用によってその計量手法を開発し，そしてそれを韓国と日本の青果物市場分析に適用した初めての研究である。その適用分析の結果から，定性分析では得られない客観的で明瞭な要因分析を可能にした。現実有効性大である。

本研究の理論性，そして実証分析の方法論の双方において学術的意義は大きい。申請者の本研究に対する研究構想力，分析の手法，研究成果のオリジナリティは博士の学位を与えるに相応しい高い学術水準に達している。

よって，著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。